essay

学校教育と農業

友田　多喜雄
（詩人・児童文学者）

十一年前、私は開拓地を離れてから十八年間住まった札幌市から、長沼町舞鶴の農家の空家へ転居しました。小学六年生に進級する息子、一年間でいいから農村の小学校生活をおくらせたかったからです。そして中学・高校生活を長沼で過させて、札幌へ戻るつもりでおりました。しかし結局、七年間の農村での日々が（そこから札幌へ通勤するにせよ）良くて、札幌の自宅へ帰らずに終の栖を隣町栗山の農村部、雨煙別の農家跡に得て現住地に移り住むことにいたしました。

我が家はＪＲ栗山駅から四・二㌔㍍、六百坪の敷地で周辺は水田と畑。ここで農薬と化学肥料を使わない自家菜園をつくり愉しみながら、読書しすこしずつ原稿を書くという生活を送っています。二十年間の開拓生活、二十五年間の専従農民運動家としての活動の後、その間に続けてきた文筆活動の延長線上に現在あるわけです。

ここに移って間もなく、我が家から六〇〇㍍程の距離にある雨煙別小学校の児童と先生たちとの交流が始まりましたが、それは荒廃が言われるようになって久しい日本の学校教育の中で、ここでは四十八年前の敗戦の日から始った戦後教育の最も正しく美しく大切なものが、守られ続けていると思われるからでした。戦後教育の基本は、言うまでもない平和と自由と個性を尊重し、教育と文化というものの正しい姿は、生産の場における人間の営みを重視すること、そこにある人々の願いや希望するものを誤りなく汲み上げること……から出発した筈でした。しかし、今日それは、風化し忘れ去られようとしています。

かって二百数十人の在校生がいた雨煙別小学校は、校下の農家減少で児童数はいま四十数人になりましたが、ここで行われている学校生活・教育を具体的に報告し表現すれば、現在の日本の教育や文化や経済や政治の歪みや荒廃を照射することになるだろう……そう考えて一年間取材し交流した末に、昨年、六十八篇の詩からなる「うえんべつのこどもたち」を書き下ろし、本年一月「びわの実学校」という童話雑誌（季刊・第二十六号、講談社発売）で一挙掲載されました。いずれ、いずれかの

略歴

1931年、東京に生まれる。敗戦直前、東京都戦災者集団帰農の一団に加わり、士別市の泥炭地に入植し20年間営農。病いを得て離農、出札し北海道農民連盟に勤務しつつ文筆活動をし、北海道の農村・農業問題を書き続け1988年退職。

1966年、新しいこどもの歌全国コンテストで特賞。69年、小熊秀雄賞を受賞。詩集・詩画集・エッセイ集・童話・農政評論集など20数冊の著書がある。

出版社から単行本として上梓されると思いますが、そこで私が学び描いたことは、多分ここでは現在の日本で一番良質で豊かな教育が行われており、それは豊かな自然の中の農村地域の学校だから可能なこと、ということでした。近年、都会からの農山村地域校への山村留学が話題を呼んでいるのは、全く同じ理由。十一年前、私が息子に農村校での教育をと考えたことと重なるでしょう。

この雨煙別小学校での学校生活に魅され注目し始めた頃、感銘したものに北海道教育大学岩見沢校の、進藤貴美子・村田文江というお二人の助教授と在校生・卒業生、その周辺の人々による民族舞踊研究会の活動があります。―昨年末に「動きの響演」という公演で、東北・今別の荒馬、早池峰大償神楽などと、モダンダンスの創作群舞に接しました。入学して七ヵ月の学生がどうしてこんなに見事に踊れるのか、太鼓を打てるのかと驚き眺めながら、進藤先生の懇切な解説をお聴きすると、教育・学問というものの重要さと見事さを痛切に感じたものです。

更に本年三月、この研究会の卒業生を送る公演「弥生三月舞い踊る」を見ましたが、琉球舞踊・大進南部駒踊り（網走管内東藻琴村に伝わり消えたものの発掘・再現したもの）、田子神楽の番楽と盆舞い、八丈太鼓・中野七頭舞・早池峰大償神楽三番叟といった踊りが見事に演じられるのに接し、感銘深いものがありました。長く農民に伝承されてきた生産と信仰に根ざしたこれらを、学び演じる教師志望者と指導者・学者・研究者がいる限り、農業にも教育にも希望が持てるなと思えたのですが、こうした教育の輪の一つに我が家近くの雨煙別小学校の学校生活もあるのだろうと考えられます。その会の前後に、私は村田助教授から著書『ふるさと天塩』（天塩町刊）を戴き、農村研究の見事な成果を知りました。小・中学生から大人までが共に読めるやさしい表現は、農村人からの聞き書きで地域の歴史や伝承を記したものですが、近刊の『新編・天塩町史』では更にそれが充実して再録され、歴史と民俗研究の貴重な収穫として多くを教えられました。